自　己　評　価　表

（令和５年度）

愛媛県立小松高等学校
11

教育方針	国家社会の有為な形成者として、個人の尊厳と責任を重んじ、豊かな文化の創造と国家社会に寄与する、徳・知・体の調和の取れたたくましく生きる人間を育成する。	重点目標	**文武両道　人間力を高め合い　夢の実現を** **ー　伝統を継承し、地域と共に歩む　ー** １　誠実で礼節を重んじ、活力に富む健全な心身を養う。 ２　学習意欲を高め、自ら学び自ら考える力を養う。 ３　一人一人の個性を伸ばし、豊かな感性や創造力を養う。 ４　多様性を尊重し、互いのよさを生かして協働する力を養う。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
学習指導	家庭学習の充実	一定時間机に向かう習慣が定着するよう、各教科でICT活用など課題の工夫や個に応じた指導を行うとともに、各ＨＲ・学年で学習への意識高揚を図り、１日２時間以上の家庭学習時間を目指す。 Ａ：２時間以上、Ｂ:1.5～２時間、Ｃ：１～1.5時間 Ｄ:0.5～１時間、Ｅ:0.5時間未満	B	考査発表期間の平日では、２時間以上学習できたのは３年生が41.3%、１、２年生は30%程度。休日の学習時間の平均は２時間以上達成しており、全学年大幅に増加している。特に、昨年度と比べ、３年生の伸びが顕著である。	家庭学習時間確保のため、各教科で課題の出し方の工夫をする。個に応じた予習・復習の方法を指導するなど、考査発表期間以外の家庭学習時間の増加を図りたい。
	教科指導力の充実	教科内及び教科間の情報交換や学習評価に関する研究を継続・発展させ、ＩＣＴ活用などにより主体的・対話的で深い学びとなるよう授業の満足度や学習意欲を高め、授業の改善を進める。	B	生徒の授業評価アンケートの全教科平均は５点満点中4.8で高評価であった。ＩＣＴの活用については、教職員の78%が有効活用に努めることができた。教科会等で授業力向上への情報交換や研究に努めているは、89%で昨年よりも増加している。	教科内及び教科を横断しての情報交換や研究を継続し、満足度を更に高めたい。ＩＣＴ活用の指導力向上を目指し、研修会や研究を行っていきたい。
		校内研究授業や相互参観授業で、年間４回以上授業を参観して、教科会や学年会などの研修も踏まえて授業力向上に努める。 Ａ：４回以上、Ｂ：３回、Ｃ：２回 Ｄ：１回、Ｅ：０回	A	今年度は基礎研修対象者が７名（うち初任者が３名）であったこともあり、研究授業の機会が多く、数値目標を大幅に超え、一人平均6.2回の授業参観を行うことができた。	相互授業参観を充実させるため、授業者と研修図書課への連絡票（授業参観メモ）を改善したが、思うように活用されなかった。徹底を図りたい。来年度も研修を充実させたい。
	資格取得の奨励	各種検定の１級合格者延べ50人以上を目標に、個別指導等の徹底や資格取得への意識を高めることにより、上級資格取得の奨励に努める。基礎・基本、実務に役立つ２・３級の合格者を増やす。 Ａ:50人以上、Ｂ:40～49人、Ｃ:30～39人 Ｄ:20～29人、Ｅ:20人未満	C	１級の合格者は、商業関係で４名、家庭科関係の合格者が35名となり、目標を達成することができなかった。商業においては、目標を大幅に下回ったが、実務に役立つ２・３級の合格率は上昇した。	資格取得は、視野を広げ、粘り強さも身に付くため、知的好奇心を持って取り組ませたい。上級資格取得は、進路実現にもつながることから、資格取得に取り組む生徒数の増加を図りたい。生徒在籍者数も減っており、目標値の変更も検討したい。
生徒指導	基本的生活習慣の確立	生徒の変化の兆候を早めに把握し、個に応じたきめ細かな生活指導と家庭との連携によって、全校出席率98%以上を維持する。 Ａ:98%以上、Ｂ:96～98%、Ｃ:94～96% Ｄ:92～94%、Ｅ:92%未満	B	全校出席率は97.0%で目標を達成できなかった。	１、２学期ともに欠席・遅刻等が増加している。個に応じた生活指導をきめ細かく行うとともに、長期休暇の過ごし方を含め、より高い意識を持って学校生活に取り組ませる指導が必要である。
		５分前登校指導を徹底し、遅刻ゼロの日60日以上を目指す。 Ａ:60日以上、Ｂ:45～59日、Ｃ:30～44日 Ｄ:20～29日、Ｅ:20日未満	C	遅刻ゼロの日は33日となった。生徒の多様化に伴い一部遅刻が多い生徒がいるが、ほとんどの生徒が５分前登校できている。	前年度よりも大幅に減っている。遅刻が続く生徒に対しては、遅刻の背景にある要因を考慮しながら、迅速に面談、指導を行う。担任・学年団を中心に生徒の実態に応じた指導を徹底して行いたい。
	生徒理解の推進	生徒一人当たり年間４回以上の面接指導を通して、生徒理解と指導に努める。 Ａ：４回以上、Ｂ：３回、Ｃ：２回 Ｄ：１回、Ｅ：０回	B	年間３回の面接週間を行っている。学年団を中心として、担任が適時、適切に生徒に向き合い、生徒理解に努めることができた。	次年度についても、担任・学年団を中心として継続して面接指導を行う中で、より生徒との関わりを深めていきたい。

※ 評価は5段階（A:十分な成果があった　B:かなりの成果があった　C:一応の成果があった　D:あまり成果がなかった　E:成果がなかった）とする。

導	環境整備への主体的な取組	環境美化への意識を高めさせ、清掃時間だけでなく、普段から校内美化に努める。地域行事にも主体的・積極的に取り組む態度を養い、奉仕の精神を育む。	B	生徒の環境美化への意識をさらに高めるため、清掃時は５分前に担当場所へ移動することや清掃後は一度集合するように呼び掛けた。地域の環境美化行事にはボランティアとして参加してくれる有志生徒が増えてきた。	年２回のクリーンキャンペーンをはじめとし、美化委員会から全校生徒への環境美化を呼び掛けるなど、今後も、各クラスの美化委員が中心となった取組となるように工夫したい。奉仕の精神で活動できる生徒を増やしていきたい。
	ルール厳守とマナー向上	街頭交通指導の回数を増やし、ヘルメットの着用をはじめ、命の大切さについての指導を行う。交通ルールを遵守し、マナーを向上する態度を育成し、交通事故ゼロを達成する。	B	登下校中、休日中の交通事故が発生した。通学時だけでなく生活の中でのヘルメットの着用、ながらスマホなど指導を続けたい。	開校日だけでなく、休日中もヘルメットの着用を促し、命の大切さについての指導を継続して粘り強く行うとともに、地域からの指摘に対しても巡視回数を増やす等の対応を継続していく。
進路指導	個に応じた進路保障	学年団と進路課が連携をとりながら、１年次から進路意識を高める指導を継続的に行い、充実した家庭学習に努めさせる。多様な入試（小論文、集団討論、プレゼンテーション等）に対応した力を育成することで、希望進路達成率100%を目指す。 Ａ:100%、Ｂ:90～100%、Ｃ:80～90% Ｄ:70～80%、Ｅ:70%未満	B	進路満足度は98.9%で、卒業前にアンケートを取り始めた４年前から最も高い結果が得られた。結果には繋がらなかったが、最後まで粘り強く挑戦し続ける生徒も見られた。 家庭学習については、大きな変化は見られず、学習面の大きな課題の一つとして継続して指導していく必要がある。	家庭学習時間の確保に向けて、学校全体で具体的な策を講じる必要がある。また、総合型選抜や学校推薦型選抜に向けて、自分の意見を自分の言葉で発表する力を育成していきたい。
	進路指導力の向上	学校説明会等に参加するなど、入試改革や学部・学科変更等の情報収集を行い、校内のネットワークシステムや教科会、学年会等を通して全体で共有する。	B	学校説明会には、３年生担任の先生には最低１回参加してもらった。逆に、高校訪問いただき提示してもらった情報も含めて、校務系メッセージにて複数回連絡したが、教科会・学年会等での共有が不十分であった。	引き続き、学校説明会での情報収集に努めるとともに、次年度は、教科会・学年会等での情報共有に努めたい。
	キャリア教育の推進	語先後礼を徹底し、インターンシップの事前指導や取組、デジタルサイネージの活用等を通し、生徒が自ら考え、行動する力を育む。校内進路ガイダンスや専門的な分野についての体験学習、職場見学など、職業理解の機会を増やす。	A	コロナが第５類に移行したのに伴い、校内進路ガイダンスを４年ぶりに再開し、７月と12月に実施した。すべての生徒が、各２校ずつの説明を直接聞けたことは、今後の進路指導に大きく生かせるものと考えている。	少しでも生徒の希望に応えられる学校選択を行い、次年度以降も校内ガイダンスを充実させていきたい。
特別活動	部活動の充実	運動部各部において、計画的により充実した指導をし、３年間部活動を継続できる生徒を増やしていく。県総体出場70人以上を達成する。 Ａ:70以上、Ｂ:55～70人、Ｃ:40～55人 Ｄ:30～40人、Ｅ:30人未満	A	昨年度と比べて団体種目での躍進があり県総体の出場者は73名となり、目標を達成することができた。また、バレーボール部男子が四国大会出場を果たした。設置部のない個人種目で四国大会出場などの活躍があった。	団体種目で合同チームの出場が認められてきており、今後の活動にも期待ができる。生徒には、３年間継続して活動することの意義を伝えていきたい。
		文化部各部において、計画的により充実した指導をし、３年間部活動を継続できる生徒を増やしていく。また、愛媛県高等学校総合文化祭等において、４つ以上の部と20人以上の参加を目指す。 Ａ:４つ以上の部で20人以上参加 Ｂ:４つ以上の部で15人以上の参加、又は、３つの部で20人以上の参加 Ｃ:３つ又は２つの部で15人以上の参加 Ｄ:２つの部で15人未満の参加 Ｅ:Ｄ評価に届かない場合	B	愛媛県高等学校総合文化祭において３つの部で20名の参加となったが、吹奏楽部が３つの部門に出場した。その中で、美術の生徒の作品が令和６年度の全国高文祭に推薦され、参加が決定した。	文化部においては、運動部よりも途中で退部する生徒が多いように感じる。引き続き３年間継続して活動することを推奨していきたい。
	生徒会活動・家庭クラブ活動 委員会活動の活性化	生徒の自主的な計画・運営による生徒会活動、委員会活動、家庭クラブ活動をそれぞれ月１回以上実施し、更なる内容の向上を目指す。 活動を通して、お互いのよさを尊重し生かし合って協働する力を養う。	B	生徒会活動は、担当教員の指導のもと各行事等において積極的に活動できた。委員会活動、家庭クラブ活動については、概ね目標を達成できている。	引き続き生徒の自主的な計画・運営をサポートし、生徒会・委員会活動充実のため、各種委員会を月１回実施する。

※ 評価は5段階(A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。

	自主的な奉仕活動	年間５回以上の奉仕活動、地域清掃活動を目指し、豊かな人間性の育成を目指す。生徒への各種ボランティア活動案内を広めると同時に、ボランティア体験の発表会等も行うことで、生徒全体の参加意識を高める。また、生徒全体の参加意識を高め、地域に貢献しようとする態度を養う。 Ａ：５回以上、Ｂ：４回、Ｃ：３回 Ｄ：１～２回、Ｅ：０回	A	竹林整備、古民家や墓地の清掃などの活動が有志によって行われた。生徒にとって奉仕の精神、人間性を育てる大事な機会だと思うので、今後も継続して実施できるよう、取り組んでいきたい。	奉仕活動や地域清掃活動は豊かな人間性を育成する貴重な機会であるため、どのような活動が行われているかを取りまとめ、積極的な参加を呼び掛けたい。
人権・同和教育	人権・同和問題学習の積極的推進	人権・同和教育ホームルーム活動に加え、多様化する人権課題に対する生徒・保護者への啓発活動を充実させる。現地研修会などの対外的な活動へ積極的に参加し、生徒が主体的に人権問題を解消する実践力を身に付けさせる。	B	対外的な活動である差別をなくする市民の集いや文化祭のクッキー販売など本来の形に戻ってきた。人権標語の展示も再開し、ＰＴＡ広報誌も継続して発行することができた。	ヤングケアラーに対する理解や支援など、人権委員会の活動を地域の啓発活動に生かしていけるようにしたい。
広報・地域協働	地域に開かれた学校づくりの推進	「学校案内」や「ライフデザインだより」等の発行物で必要情報を伝え、ホームページでよりタイムリーな情報発信を行う。 学校行事や校外活動において、生徒の活躍の場や主体的に活動できる場面を増やし、より地域に開かれた教育活動を目指す。そのことで、地域に信頼され、親しみやすく開かれた学校づくりに目指す。	B	「学校案内」「ライフデザインだより」等の発行物で情報を的確に発信できた。ホームページも随時、継続ができており、行事等に関する事前の広報や活動報告においても情報発信ができた。 市教育委員会学芸員と市役所共創による地域講演会、東予歴史トリップの実施、地元の古民家や史跡探訪についてのフィールドワークや探究活動、医食農業連携プラットフォーム会長による小松藩についての講演会など、数多くの地域に開かれた取組が行われた。	今後も、地域の「歴史・文化・教育」について知り、郷土を誇りに思い、「歴史・文化・教育」を柱とした地域資源の活用を目指した人材育成を行いたい。また、それらに関する発行物やホームページを通じて、よりタイムリーな情報発信も図り、地元の小・中学校との交流の促進化も図るなど、地域に開かれた学校づくりに邁進していきたい。
	地域に根ざした特色ある学校づくりの推進	ＰＴＡ・同窓会や地域の諸団体と協力し、「総合的な探究の時間」や課題研究で、地域人材を活用した体験学習を実施する。 地域の「歴史、文化、教育」を知ることで、地域を誇りに思い、地域に貢献できる人材育成の研究を行い、地域に根差した教育を展開する。 ＳＤＧｓの観点を踏まえた授業や地域と協働した地域貢献活動等を積極的に実施し、特色ある学校づくりに努める。	B	同窓会館（養正会館）に「えひめ教育資料館」を開館させ、地元の歴史・文化・教育等の発信拠点としての広報活動ができた。 ＳＤＧｓの観点を踏まえた課題研究での取り組みや地域と協働した地域貢献活動等を積極的に実施できている。今後も進学や就職のためにするボランティア活動ではなく、生徒が自ら主体的に考えて地域と関わる機会を増やしていきたい。	今後も、「えひめ教育資料館」を整備し、地域文化発信の拠点として広く公開するとともに、積極的に社会と繋がる活動を行う。また、持続可能な開発目標の観点から、竹林整備活動を発展させた取組への挑戦（竹を使う活動等）、段ボールコンポストをはじめとし、商品開発やイベント参加など生徒が主体的に活躍できる場を提供していきたい。
業務改善	適切な勤務時間	教職員の定時退勤日の設定や部活動の休日の確保などにより、教職員の勤務時間を守る。また、ＩＣＴ導入で業務の効率化・平準化を図り、時間の有効活用を推進する。 毎月、１回は「はよ帰るデー」を設定し定時退庁のびかけを行い、ワーク・ライフ・バランスを目指す。	B	校務系によるメッセージ機能やアンケートの実施、掲示板による情報共有が昨年度と比較して多くなった。職員朝礼時のプリントを上手く使い、効率化が図られている。勤務時間の超過が顕著な先生方には面談等も実施し、業務改善などの工夫へ促すことを適宜行った。	定時退勤の設定日を、一律にではなく、月に一度以上は一人一人が行えるような雰囲気を醸成していかなければならない。また、一層のテレワークの活用を勧め、更なる時間の有効活用を図り、ワーク・ライフ・バランスの向上を目指したい。また、今年度も12月から来年度の反省と提言を考え検討することを始め、教職員のよりよい働き方改革を推進しているところである。
	職場環境の整備	健康講座や健康相談を定期的に実施したり、休憩場所の環境改善を行ったりすることで、教職員の疲労や心理的負担の軽減を図る。 月一回の衛生委員会において、教職員の健康や学校安全に関する情報共有を密に行い、教職員が、より働きやすい環境作りを目指す。	B	毎月の衛生委員会に加え、健康相談の資料の提示や学校医との健康相談などを行った。また、職員室の共有部分である流し台、洗面所の清掃を毎日行って環境美化を図った。また、校内の教員研修でアンガーマネージメント研修を行い、親睦と交流を図る機会を持つことができた。	日常的なコミュニケーションを大切にし、教職員が支え合い、助け合える人間関係を築くとともに、教職員のメンタルヘルスケアに取り組み、心身ともに充実した職場づくりに努めたい。

※ 評価は5段階（A：十分な成果があった　B：かなりの成果があった　C：一応の成果があった　D：あまり成果がなかった　E：成果がなかった）とする。